

はなぶさのあの感動をもう一度①

NHKラジオ
2012年8月28日

的川 泰宣(まのがわ やすのり、1942年2月23日-)は、日本の宇宙工学者、工学博士である。専門は、軌道工学、システム工学。

JAXA名誉教授を務めている。宇宙教育によって日本と世界の子どもたちを元気にするとの志を掲げて、2008年5月にNPO法人「子ども宇宙・未来の会(KU-MA)」を設立し、会長として日本全国を飛び回っており、そのKU-MAが主催する親子教室「宇宙の学校」が全国でひろがりつつある。

KU-MAは2011年4月に国税庁から「認定NPO」の認定を受けた。

2011年10月28日、品川プリンスホテルで講演中、脳幹出血で倒れ、救急病院に運ばれ20日間入院した。幸い後遺症は全くなく、従来通り元気に活躍している。

的川 泰宣 「はやぶさ」プロジェクトを語る。

全員がミッション達成を最優先、そこに真のチームワークが生まれた。



小惑星探査機「はやぶさ」は2010年6月13日に地球に戻ってきた。6月13日は「はやぶさの日」に指定された。子供達の宇宙への関心が高まり、広がったのは国造りのためにも良かったと思っている。私は今、宇宙教育を手掛けています。単なるロケット教育ではなく、宇宙はあらゆる命を育む舞台と考えている。

子供の頃は夜釣りを楽しんだりした。星がきれいだった。昼は野球・テニスに没頭していた。プロの選手になりたかった。広島の実業家の生まれで広島カープファンだった。当時はスリムで、これほど太るとは思ってもいなかった。

小学校の終わりごろ、自戒が目覚める頃、みんなが幸せになれる世の中作りに役立ちたい...と思った。大学では宇宙工学を選んだ。米ソの宇宙開発が始まり自分が生きているのは宇宙時代だ...と意識した。天文学ではなく宇宙工学(ロケット工学)を選んだ。ここで糸川先生とであった。糸川研究所に入って2年間指導を受けた。あれほど大きな指導を受けた人はいない。糸川先生は独創的、発想が違う人、やりたいことは真直ぐ進んでいく人。いつも障害にぶつかった時、糸川先生だったらどう考えるか考えた。その日その日、考え方が違い自由自在。やりたいことはまげない人だった。ある種、わがままに見える位...

今までロケットは数百打ち上げた。一番初めの人工衛星「おおすみ」24kgの打ち上げ成功は嬉しかった。

1995年にプロジェクトは認められ8年後の2003年に「はやぶさ」は打ち上げられた。自分のプロジェクトでの仕事は対外研究室長、広報的な仕事だった。大概のことは協力する仕事...川口さん(一回り若い)が「はやぶさ」の責任者、プロジェクトマネージャー。20世紀FOXの映画では西田敏行さんが自分の役をやられた。西田さんは「はやぶさ」を演じながら被災地・郡山を気にしていた。漁業交渉などは十数年やってきた。本当の楽しみは苦しみを通してのみ得られるものと思っている。

「はやぶさ」は7年かかって戻ってきた。この期間は夢中ですぎた7年間だった。行きに2年、帰りに2年+3年、5年かかった。

「はやぶさ」にお金がなかったのが良かった。自分たちの手足を使ってやっていたのが、いざと言う時にきいた。人間はハングリーでないとダメ。日本の物づくりの良さを再認識した。皆に支えられた7年間だった。「はやぶさ」は科学技術の粋。

あるガン患者は「はやぶさが帰ってくるまで頑張ると、言っていた」

2010年6月13日に地球に、オーストラリア上空に戻ってきた。「はやぶさ(母親)」は燃え尽き、カプセル(子供)が地球に戻ってきた。「はやぶさ」の運命を科学だけではなく、人の命の問題としてとらえた人が多かった。

秋、長野伊那谷に行った時自分の印象・感覚を詩に書いた。詩に出てくるカノープスは「はやぶさ」の基準となる星。地球に戻る日は南十字星が「はやぶさ」を出迎えてくれた。

「はやぶさ」が小惑星いとかわについて戻ってきた。

自分の詩に服部さんが曲をつけて歌にしてくれた(「夢をのせて」)